

# 花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記2

国立市立国立第七小学校

平成26年6月9日 NO.23 (123)

アオムシコマユバチ (コマユバチ科) のまゆ



3年生 「モンタ博士！」

モンタ博士「どうかしたの？」

3年生 「あのね、ぼくたちアオムシをね、つまりモンシロチョウの幼虫（ようちゅう）を一生懸命に（いっしょうけんめい）に育（そだ）てていたんです。」

モンタ博士「なるほど、なるほど。それで・・・。」

3年生 「そしたらね、なんと、小さな虫が出てきて、いつのまにか写真（しゃしん）のようなまゆになってしまったの。」

モンタ博士「なるほど。それはアオムシコマユバチという寄生蜂（きせいばち）だ。」

3年生 「アオムシコマユバチ？はじめて名前を聞くハチですね。」

3年生 「寄生蜂？どんなハチなんですか。」

モンタ博士「アオムシコマユバチのメス蜂がモンシロチョウの幼虫にたまごをうみつけて、

モンシロチョウの幼虫に寄生（生物がほかの生物から養分〈ようぶん〉をうばって生活すること）するから寄生蜂というんだよ。」

3年生 「うみつけられたたまごは、その後どうなるのですか。」

モンタ博士「たまごからかえったハチの幼虫は、モンシロチョウの幼虫の体を食べながら、つまり、養分を取（と）りながら大きくなっていくんだ。」

3年生 「モンシロチョウの幼虫は死（し）なないのですか。」

モンタ博士「モンシロチョウが死んでしまったら、ハチの幼虫も死んでしまうだろう。そこで、ハチの幼虫は死なない程度（ていど）にモンシロチョウの幼虫を生かしながら養分をとっていき、大きくなるんだ。」

3年生 「寄生されたモンシロチョウは、もうさなぎになったり、成虫（せいちゅう）になったりできないのですか。チョウにはなれないのですか。」

モンタ博士「そのとおりだ。チョウにはなれない。」

3年生 「そんなの、ちょっとずるい感（かん）じがしますが・・・。」

モンタ博士「そうともいえないんだ。食（く）う・食われるのが生物界（せいぶつかい）のすがたなんだよ。ヘビとカエルの時と同じで、生物はみんな、生き物どうしでそのようにつながっているんだ。もし寄生蜂が寄生しなかったら、モンシロチョウだらけになってしまうんだ。」

3年生 「そうか、ハチが寄生することで、生物界のバランスをとっているということですね。ヘビとカエルの関係（かんけい）も同じなのですね。」

3年生 「モンシロチョウは、どのくらい寄生されているのですか。」

モンタ博士「いろいろな研究者（けんきゅうしゃ）が調（しら）べた結果（けっか）、100匹（びき）の幼虫のうち、成虫までなるのは数匹なんだ。ある本には2パーセント、つまり100匹のうち2匹という報告（ほうこく）もあるよ。」

3年生 「そうなんだ。それじゃ、ほとんどの青虫はモンシロチョウになれないの。」

3年生 「それじゃ、どうすればいいんですか。モンタ博士！」

モンタ博士「幼虫には、寄生蜂がたまごをうんでしまうけど、たまごには寄生できない。だから、たまごの時から育てれば、絶対にうまくいくよ。まちがいなしだ。」